

【草花の部屋】

カボチャ（ウリ科カボチャ属 Cucurbita）

和名：カボチャ(南瓜)

別名：ナンキン(南京)

英名：pumpkin

ウリ目 蔓性一年草

原産地：南北アメリカ

花言葉：広い心、大きさ、広大

花色：黄、橙



← 写真-1 カボチャ

撮影日：2019年06月19日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

↘ 写真-2 カボチャの果実

撮影日：2019年06月19日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん



← 写真-3 カボチャの雄花

撮影日：2019年06月19日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

大和郡山市郊外の家庭菜園で見かけました。特別、珍しい植物ではありませんが・・・。

葉は大きく突起を持ち、斑模様や裂片をつけます。花は黄色や橙色。雌雄異花で雌花は下位子房です。また、雌花と雄花の開花時間が微妙に違うため、受粉のハードルが高く、自然受粉だけでは難しいそうです。また、カボチャの受粉能力は朝方が一番高いため受粉させるのは早朝がおすすめです。

本葉が5～6枚で親蔓の先端を摘芯して子蔓の生長を促し、その後、子蔓を2～3本伸ばします。残す蔓以外の蔓はかき取ります。株元近く(葉が5枚以下)の雌花はいい果実にならないので、早めに摘んでおくとういそうです。また、光合成をしっかり行わせるために、葉と葉が重ならないようにすることが大切です。葉が混みすぎている時は、実が付いていない枝を切って風通しを良くして受光をよくすると、うどんこ病の予防にもなります。窒素過多だと「ツルボケ」して果実がならない場合があるので要注意です。

カボチャ(南瓜、英: pumpkin、米: squash)は、ウリ科カボチャ属に属する果菜の総称です。名前は、ポルトガル語に由来しているそうで、通説として「カンボジア」を意味する Camboja(カンボジャ)の転訛ともいわれているそうです。方言では「ぼうぶら」「ボーボラ」などの呼ぶ地方もあり、これもポルトガル語で、「カボチャ」や「ウリ類」を意味する abóbora(アボボラ)に由来するとされています。ほかに「唐茄子(とうなす)」「南京(なんきん)」などの名もあります。漢字表記「南瓜」は中国語の南瓜(ナングア; nánguā)によるものだそうです。

一般に栽培されているのは、C. argyrosperma(二ホンパイカボチャ)、クロダネカボチャ、セイヨウカボチャ、ニホンカボチャ、ペポカボチャの5種とそれらの雑種だそうです。

日本への渡来については諸説あるそうですが、ニホンカボチャは天文年間(1532年-1555年)に豊後国(現在の大分県)にポルトガル人がカンボジアから持ち込み、当時の豊後国の大名であった大友義鎮(宗麟)に献上したという説が有力だそうです。このカボチャは「宗麟かぼちゃ」と名づけられ大分県などで伝統的に栽培されています。ペポ種は中国を経由して来たため唐茄子とも呼ばれています。

<ちょっと一言>

下位子房

ウリ科(カボチャ、ツルレイシ、スイカ)の花やキキョウ科の花では、子房は花被の付け根よりも下にあります。子房はまわりの組織に埋め込まれていて、花を上からのぞき込むと、まるで花の底からいきなり花柱が突き出しているように見えます。このような子房を下位子房(inferior ovary)とされています。